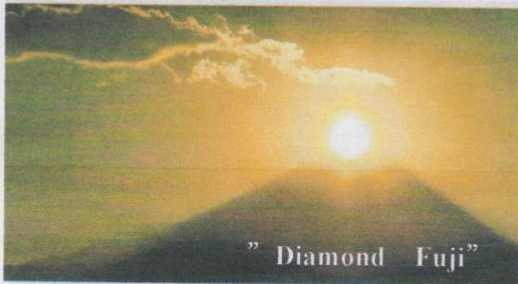


# 日大島根桜信会便り

日大島根桜信会便り第16号【通算20号】  
 発行 平成26（'14）年1月1日  
 日大島根桜信会（日本大学通信教育部校友会島根県支部）  
 坂本育穂 〒690-0871 松江市東奥谷町256-3



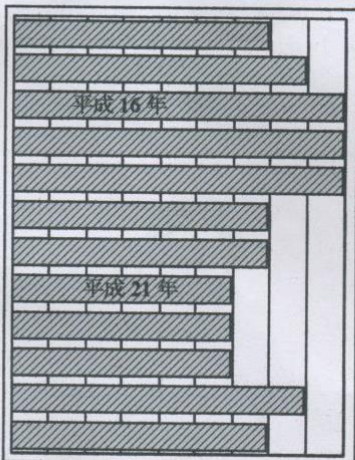
”Diamond Fuji”

## 謹賀新年

明けましておめでとうございます。  
 皆様にはお元気で新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

本年も変わらませずよろしくお願い致します。

(Photo by Koshiba Risa from Mainichi Weekly 1/14/2014)

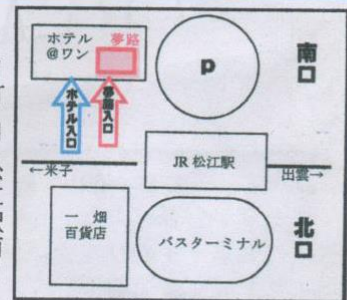


「過去10年の出席状況」

出席者数は平成の

最大の9。最小は平成21～23年の6。顔触れも固定化していません。奮ってお出かけください。

日町「R」松江駅南口 ホテルアルファワン 内1階  
 会費 4千円  
 費 2千円  
 （平成25年度 校友会費） 計6千円  
 審議 平成25年度  
 度会務及び決算報告  
 懇親会・写真撮影  
 出欠回答葉書を同封して  
 います。  
 2月15日迄にご返送  
 ください。



平成 25/2/24 松江「夢路」

平成25年度 「日大島根桜信会」総会開催案内  
 例年のとおり総会を開催します。  
 開催日時  
 平成26年2月22日  
 午前11時30分  
 場所 「夢路」松江市東朝  
 ホテルアルファワン（@1）



→平成17/2/19 出雲「もりやま」

→平成15/10/18 浜田「さか本」



- 25年度会費 納入者お名前
- 栗原雄蔵
  - 山下嘉三
  - 宮崎健治
  - 岩崎幸夫
  - 河津和彦
  - 森山孝一
  - 齊藤康子
  - 山下竹司
  - 小島昭典
  - 大原義隆
  - 周藤昇
  - 嘉藤三枝子
  - 村上謙武
  - 澤田寿子
  - 酒井實三
  - 角利雄
  - 吉岡正治
  - 河野義男
  - 石津公雄
  - 加本良治
  - 田久和剛史
  - 中谷徹二
  - 坂本育穂
  - 以上再掲
  - 岡重雄
  - 寺戸剛
- （同敬称略）  
 同封「振り替  
 え用紙」で平  
 成26年度年会  
 費2000円也を  
 お願ひ致しま  
 す。日頃のご  
 支援を心より  
 感謝致します。

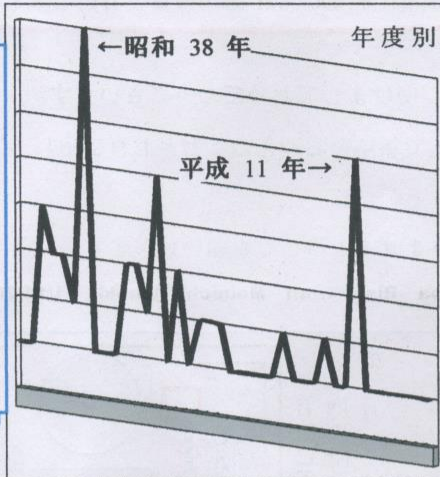




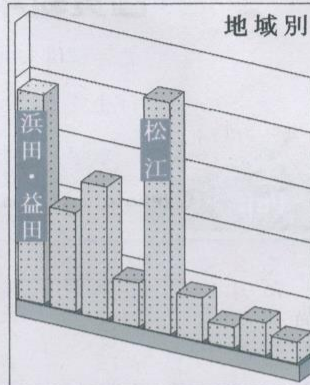
# 5年ぶり島根県卒業生誕生

平成 25 年 9 月 日本大学通信教育部法学部法律学科 卒業 石原琴美さん 出雲市渡橋町  
 \*平成 20 年 4 月 田久和剛志(文/史学)さん卒業以来 5 年ぶり。お目出とうございます。

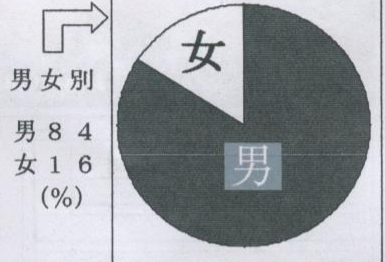
グラフに見る島根県校友の様子



→●昭和 35 年 8 名。平成 11 年 6。昭和 45 年 5。昭和 30 年 4。  
 昭和 31、33、41、43 年 3。 ▲平成 13 年以降は 0 乃至 1。



→●松江 21。浜田・益田 19。出雲 12。大田・江津 9。安来、雲南 4。隠岐 2。県外 3。



56

雑感 文 43 森山 勝 「日大島根」第 4 号/昭和 46 年 4 月 1 日発行より  
 また今年も暮れようとしている。”光陰矢の如し”とはよく言ったもので、最近は特に一年の経つのが早い気がしてならない。三十才を過ぎると、何か慌ただしく年を重ねていくようである。年寄りくさいことを言って……と思われるであろうが……。高校を卒業した時、頭を痛めた教科書を忘れないために、ひまの時読み返えしてやろうと思って机の前に置いた本の中には、一度も手にしないまま、十五・六年、未だに埃を載せたまま収まっているのがある。師走となり家の中を整理する時、過ぎこし歳月をあらためて思い出すのである。暇がある時勉強しようと思ってもなかなかできないことを痛感するわけである。人間の意志のもろさを感じ、寒ければ寒いと言ってこたつにもぐり、暑ければ暑いと言って寝転ろがっている、所詮目的の達成など思いもよらないことだろう。物質文明の波は大きく、高度経済成長で生活水準はあがり、よく言えば、合理的に住みよくなってきたが、反面、苦勞を厭い、安易に流れやすくなり、すべてが華美となり実のない面がみられつつある感がある。”家貧しくして……”の諺どおり、勉学は満足すべき環境では決して意のある学はできないのではなからうか。また勉学は追われてすべきもの



出雲市出身看護師 伊藤明子さん

2013.10.29 「山陰中央新報」  
 アフガニスタン・カンダハルで医療支援をする伊藤明子さん=9月(共説)

「夢」失わず国際救援  
 平成 11 年 文理学部英文科卒業  
 反政府武装勢力タリバンの戦禍が続くアフガニスタン南部カンダハルの州立ミルワイズ病院で、日本人看護師が医療支援に奔走している。国際救援の夢を現と駆け立てるのは恩師の言葉。日々、医療現場の課題に取り組み、アフガニスタンを願う。

## 祝 秋の叙勲【瑞宝小綬章】 山下嘉三さん(昭 43 /法・松江市)



奥様も後ろで

ではなく、その中に喜びを見つけて、進んですべきものであろうが……ついつい他事にことよせて、ひまのないことを嘆き、レポート書きにあくせくする身を反省することしきりの現在の私である。仕事と勉強はたしかに困難ではあるが、ある人の”多忙であれあるこそ、そこにひまができる”ということばは味わうべきであろう。年の終わりがせまり、机上整理をする時、棚の教科書についてあれこれ思い、己の怠惰さをひしと反省するのである。森山 勝さん(昭 49 /法) 平成 25 年 3 月 27 日ご逝去。 「日大島根接信会便り」平成 25 年 7 月号既報。



1.<序> JR 徳島駅の南西 2K 程の所にどこから見ても眉をひいた姿に見える山と言うことから名づけられた眉山がある。此处へはロープウェイで標高約 280 m 地点まで到達できるのだが、頂上



駅の近くにモラエス資料館がある。モラエスとはポルトガル人で、明治から大正に掛けて著述により日本を紹介したヴェンセスラウ・デ・モラエスのことである。2階の展示室でモラエスの写真・遺留品等を見ていて、年表の中に「1912(明治 45・大正 1) 年出雲の女永原(後矢田) デン、モラエスのもとに奉公にくる」とあって吃驚した。まさかモラエスと出雲が結びつく等想像外だった。その上にモラエスはハーン(小泉八雲)の敬愛者でもあったというから、この二点において出雲とモラエス

に縁があることを知って、この事を書いてみようと思いついたのだが、ハーンとの関係により多くの論考があり、おこがましい限りだが、「モラエス(岡本多希子) 2008」を主たる参考として紹介してみたい。

2.<略歴> 1854(嘉永 7・安政 1) 年ポルトガル・リスボンに出生、18 才で海軍に入り軍艦に乗務してモザンビーク、ザンジバルに勤務転戦して約 10 年後マカオに転属。大尉に昇進後マカオ常駐の軍艦々長として香港、シンガポール、ティモール各地を回航、1889(明治 22) 年長崎、神戸、横浜へ初めての訪日。1891(明治 24) 年、マカオ港港務副司令官、阿片輸出入取締監督官となり少佐に昇進し、1893(明治 26) 年にはポルトガル外交使節一員となって横浜、大阪へ武器買い付け出張に再来日。その後人事面に不都合が生じて役職を辞任、紆余曲折の後 1899(明治 32) 年正式に神戸大阪ポルトガル領事となる。以後神戸にあって、外交面での活動を種々行うも、折から本国は王政から共和制への動乱変転期でもあり、自分の地位についての齟齬に不満で領事辞任及び軍籍を離脱。1913(大正 2) 年、愛人故福本ヨネの墓を生地徳島市の寺に建立すると共に徳島永住を決意。徳島ではヨネの姪コハルと同棲したが 2 年後にはコハルとも死別。隠遁生活中的の徳島の自宅でこの世を去った。75 才。滞日期間は 31 年、ハーンは 14 年。

3.<著作物> 著作の最初は 1895(明治 28) 年の「極東遊記」で、マカオを基点に軍務で航海したバンコック、シンガポール、香港、長崎を始め日本等で見聞経験したことを、ポルトガルの新聞に寄稿した短編を纏めて刊行したもので、折から日清戦争とも相俟って極東アジアが注目を浴び、1897(明治 30) 年にはリスボン地理学協会の依頼を受けて「大日本」を発行、これは神話の時代から始まる歴史、美術工芸、生活等全て日本に関するもので大好評を得、ポルトガルでの彼の文名は一躍挙がった。神戸在住中にポルト市の「ポルト商報」に 1902 年から凡そ 6 年間に渉り掲載された「日本通信」があるが、徳島移住後には「徳島の盆踊」「おヨネとコハル」等があり、最後の作品は 70 才の時の「日本精神」。「(略) この『日本精神』をも出版し、かくして日本民族に関する研究の小論を完成せんとする考えを起こした。これが『日本精神』のできた訳である。国民の歴史と国民の精神とは、大変異なったものではあるが、たしかに、一つの目的に向かって互いに相扶けながら結集したものである」(「日本精神」自序) と、言語、宗教、歴史、家族生活、種族生活、国家生活、愛、死等をテーマに日本人の精神構造を描いた。

4.<モラエスとハーン>

復元されたモラエスの書斎(資料館) →



「モラエス(岡村多希子)」によれば、モラエスが初めてハーンに言及するのは 1904(明治 37) 年 4 月 5 日の「日本通信」の記事で、日露戦争が勃発して世界の目が日本に注がれている時に当たり、日本関係の書物を読んで欲しいと訴えてチェンバレン、ゴンクール、ハーンの名を挙げていたという。

モラエスがポルトガル領事として、神戸を中心に活躍した絶頂期だ。半年後の 9 月 26 日ハーンは東京で没するが、10 月 26 日付けの「日本通信」で「ラフカディオ・ハーンの死」と題してモラエスは「交際嫌いで神経質で偏屈な気質で、最近では東京に住む多くの外国人とのどんな交際も絶対拒んでいた。9 月 26 日の朝突然死んだ。埋葬は仏式で行われた」と書いた。この記述は、そっくりその俣後年徳島に隠棲した彼に当てはまるものだ。続けて、「(小泉八雲は日本を崇拜し) すばらしい叡智、随想的で繊細な芸術家気質、美しい形式で日本に関する数多くの著書を書き、ひどく日本的な随想を出版したがその全てがすばらしい文学の宝玉であった」と絶賛している。

鶴見俊輔(秦敬一の著述からの引用)によると「モラエスはハーンを愛読していた。(徳島の孤独生活の中でも) 机の側に置く数少ない本の中にハーンの本があった。それを繰り返し読んだらしい。海軍軍人として初めて東洋に来た頃には、特に日本文化に対して自分の心情を託そうと考えていた訳でもないよだから、彼が日本文化を理想化して考えるようになったのは(略) 何人かの日本の女性の影響による以外にはハーンの影響によるものと考えられる」と。モラエスの来日は 1890(明治 23) 年横浜に到着したハーンより 1 年早い。ハーンが神戸にいた 1894(明治 27) 年頃、モラエスはマカオから用務で訪日し、一説には既に神戸に滞在していたというが、ハーンは 1896(明治 29) 年、帝国大学講師となって東京へ去り、1904(明治 37) 年に亡くなる迄、焼津、横浜以外は東京在住なので、この二人の接触は無さそうである。



## 5. <モラエス多情>

モラエスを廻る女性は実に多彩である。「モラエスと七つの恋」は1955(昭和30)年「英文毎日」からの出展だと「モラエスとハーン展」記念誌にある。それによれば、ラウラ、イザベル、アルシー、亜珍、おヨネ、永原デン、コハルである。ラウラはプラトニックラブだったが、イザベルは8才年上の美しい人妻で、モラエスには初めての生涯を掛けた恋だった。17歳から16年間関係は続いたが破局。アルシーはこの間のモザンビークの現地妻。混血娘亜珍は15才のマカオの契約妻で、男子2人をなしたがモラエスが神戸に行くとも関係は絶える。復縁を迫って親子は数回日本を訪れたものの拒否。徳島生まれのヨネ(福本ヨネ)は大坂松島遊郭の廓芸者だったといわれ、神戸で一緒になった頃、モラエス46才、ヨネ25才。「日本精神」の中で、モラエスは日本女性の献身、繊細な魂、優しさ、従順さ、自己犠牲に触れ、「極端な程個性のない日本女性は、家庭にあっては無であるどころか全てなのだ」と、イザベルや亜珍には無い女性像をヨネに見出し同棲生活はヨネが亡くなる迄凡そ12年間続き、遂には徳島にヨネの墓を立てると共に永住を決めた。徳島の隠棲生活ではヨネの姪コハル(斉藤コハル)がいた。この時モラエス58才、コハル19才。このコハルも23才で喀血して死ぬ。永原デンは、ヨネの死後(生前からとも)モラエスと半年ばかり生活を共にした



た女性で当時25才。昭和4年7月11日の山陰新聞は「寂しく逝いたモラエス氏/十数万の遺産を廻り/過ぎし日の思ひ出/思わぬ福音ころげこむ/今は矢田夫人の彼女は語る」と題してインタビュー記事を掲げた。それによると、ポルトガル神戸駐在領事がモラエスの遺書を見た中に「遺産の一部を永原傳と言う女に与えてくれ」とあり、調べてみると「簸川郡今市町永原太郎の長女であると」判明、更に島根県警察部を通じて現に、今市町御茶屋町骨董店矢田新吉の妻オデンさん「ではないかとの噂があるので訪れて見ると問題のオデン夫人は過ぎし日の想ひ出に呼び返されたかの様に微笑を浮かべながら左の如く語った」とある。彼女の語る所にいわく、実家の没落後裁縫の師匠を頼って下関に行き、その後伊勢の国の師匠の姉の嫁ぎ先の養女にと言われたが断り、下関の鉄道員に嫁したが死に別れ、大阪堂島の米穀商の世話で「モラエスの妻となりました」と。モラエスは「大の日本趣味の人で以前徳島市から迎妻して(ヨネの事:筆者注)十餘年の同棲をしていた程で御座いますから私にも非常によくして呉れましたけど、気分の勝れなかった私は故郷恋しさのあまりしいて離別し帰郷しました」「何でもかでも持って行って呉れと親切に申しましたけど何にも受けず自分の筆筒さへ置いて僅かな小遣ひ銭を貰って帰りました」。その時モラエスは、将来の生活に困らぬ位の事はする、自分が死んだら遺骨を祭ってくれと「涙をこぼしながら」頼み、領事立會の元に遺骨を祭ることや遺産を送る話をした、その後「私を餘程力に思っ」てか復縁を願う手紙が2回あった、「ほんとうに親切なあの人の遺骨の分配にあづかる申し出も」出来ないのですまないと申しますと「過ぎし日の想ひ出に涙を一つばい湛えていた」と写真(上)入の記事は終わる。

モラエスはハーン縁の土地でもありデンの誘いに乗って出雲へ行く積もりであった事は確かだったらしい。しかし亡くなったヨネへの思慕はそれ以上であり、面倒を見てくれるコハルのいる徳島で暮らすことを選んだのだった。

6. <終焉> 1929(昭和4)年7月1日朝、隣人が転倒して頭部強打で死んでいるモラエスを発見した。元気な時は潮音寺のヨネとコハルの墓参が日課だったが、体も次第に弱り死の直前には家内での移動も困難だったという。「畳は穴だらけで湿気を帯び腐ったり染みが付いて」いたと検分したポルトガル代理公使の報告にある。遺産は蔵書の他に金融遺産として普通預金524円50銭、定期預金2万200円という思いもよらぬ多額だった(賄い付き下宿代30円『値段の風俗誌』)。デンの遺産額について、佐藤剛「失われた楽園」は「少なくとも1万円が送られた事は確かである」としている。山陰新聞の「十数万」は意味不明。何故デンにそれ程の遺産贈与があったのか、「モラエス」は人々の興味をそそったこの問題を「ヨネとコハルを失った彼には、遺産を贈るべき愛するものが誰一人身近にいなかっただけ、なのではないか」と結論付ける。

好意を抱けない亜珍と二人の息子には法定の必要最低限以上の金額が行かないようにした。「私は別離や破局の打撃を知っているし、今日なお私の心はそのために血を流している……。愛した、苦しんでいる、全ては終わった、全てではない。なお恋の輝かしい様相の一つである追慕(サウターデ)の情が残っている。(おヨネとコハル)」と言うヨネもコハルも今はこの世にいない。「過去の甘美な思い出に結ばれているデン」だけが生きていたのだった。「ワタシハモシモ シニマシタラワ タクシノカラダ ヲトクシマニ ヤイテクダサレ」の遺言どおり火葬になりコハルの墓に納められた。私が潮音寺で見たのは、一番左にコハルとモラエス、中央に新しい(平成5年建立)ポルトガル大理石のモラエス、右にヨネの3つの墓である。

16世紀、日本に初めて鉄砲を伝えたのはポルトガル人。それから400年後、範囲としてはハーン程では無かったかも知れぬが、日本文化を紹介したポルトガル人モラエスの功績は心に留めておきたい。

モラエスは 阿波の辺土に死ぬるまで 日本を恋ぬ 悲しきまでに 吉井 勇